

濱一衛の見た一九三〇年代中国演劇：京劇

中里見，敬
九州大学：准教授

<https://doi.org/10.15017/1498257>

出版情報：中国文学論集．43，pp.235-244，2014-12-25．九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：



濱一衛の見た一九三〇年代中国演劇——京劇——

中里見 敬

一 はじめに

中国演劇研究者・濱一衛（一九〇九～一九八四）は、一九三〇年代の北平留学中に観た演劇の上演記録を残している。それらは演劇研究にとって一次資料としての価値を有するものである。ところが、濱の収集した中国演劇資料が九州大学附属図書館濱文庫として国内外の研究者に珍重されているのに対して、濱自身によるこれらの記録は必ずしも十分に評価されていないように思う。本稿では、主著『北平的中国戯』および『支那芝居の話』に記された京劇の観劇記録について見ることにし、崑劇およびその他の劇種については別稿で論じることとした。

二 京劇

一九三三年に京都帝国大学を卒業した濱一衛は、翌一九三四年五月から一九三六年六月まで北平に留学し、周作人邸に下宿した。濱一衛は京大在学中に東方文化学院京都研究所の嘱託講師・傅芸子（一九〇二～一九四八）に教えを受けたと思われ、留学中はその弟・傅惜華（一九〇七～一九七〇）や齊如山といった北平国劇学会の主要メンバーからも厚遇を受けた。^①こうした恵まれた環境の中で、濱は精力的に劇場に足を運んだ。現在濱文庫に所蔵される戲単一八三枚のうち、約一二〇枚は留学期間中と重なる北平の戲単である。

濱一衛の見た一九三〇年代中国演劇

しかし、当時二十歳代の濱は、まだ研究者として論文を発表したこともなく、また『順天時報』の記者であった辻聴花（一八六八—一九三一）のように劇評家として発表の場を確保しているわけでもなかった。そのような濱が留学から帰国後わずか半年の一九三六年十二月に東京の秋豊園から『北平的中国戯』を刊行する。同書は中丸均卿との共著であるが、奥付に「著者 濱一衛／著者 中丸均卿／装幀・挿画 中丸均卿」とあることから、文章の多くは濱自身の手になるものと思われる。

『北平的中国戯』は第一部「中国戯の過去」で元代から清代までの演劇史を略述したうえで、第二部「中国戯看聴記」で役柄ごとに俳優評を行っており、この部分全体が当時の上演の貴重な記録となっている。第二部の前後に、次のようにいう。

僕達はせめて此二年（昭和九、十、十一に跨がつた）北平で楽しんだ懐しい役者達の姿を拙い筆で書き乍ら北平劇壇の様子を思ひ起さう。（『北平的中国戯』五四頁）

以上京戯（皮簧戯を主とする）の北平を中心にする名優の主なる處を擧げた。梅、余の兩大王はのぞいて、あとは俳優達の最近二年直接見た處に依つて書いて行つた事は、前にのべた通り。……勿論好惡に従つて勝手な熱を吹いてるとは承知されたい。（『北平的中国戯』八九頁）

しかし、劇評ではなく俳優評という著述スタイルであるために、具体的にいつどこで行われた上演であるかを特定することは、残された戯単と突き合わせてもなお容易ではない。本稿では戯単によって上演日を持定できた二つの公演を中心に、濱の俳優評を見ることにしよう。なお、戯単は篇尾に掲載した。ご参照いただきたい。

二・一 一九三四年九月八日 開明戲院（図1）

留学を開始してまもない一九三四年九月八日、開明戲院で武生・楊小楼と浄・郝寿臣の演じる「戦宛城」を見ている。『北平的中国戯』について一九四四年に出版した『支那芝居の話』（東京…弘文堂書房）では、十年前に見た「戦宛城」を回顧して、その間に亡くなった楊小楼と劉盛蓮を惜しんでいる。

この狂言（戦宛城）は光緒十八九年の頃、譚鑫培の同慶班で、譚と田桂鳳とで出されたのが北京では最初

といひますが、實は夏月恆がやつたのが最初ともいひます。崑曲から改められたのです。その時内容が淫猥だといふので禁ぜられたこともありました。役者が揃へば面白い芝居です、今迄觀た中で面白かつたのは數年前、開明で楊小樓の張繡、郝壽臣の曹操、劉盛連「蓮」の鄒氏、錢寶森の典韋、王福山の胡車兒といふ役割でした。この中、楊劉は既に鬼籍に入り、郝は隠退してゐます。近頃では民國二十九年五月に、尚和玉の張繡、侯喜瑞の曹操、荀慧生の鄒氏で出てゐますが、最高のキャストでせう。なほ鄒氏役は小翠花も定評があります。眼立つて面白く思はれるのは、曹操の馬が青苗踏む大芝居と鄒氏の細い仕事です。殊に鄒氏の思春の場が一番の仕どころで蕩婦の春情をよく出します。繡巾を持つて秋波を送つたり、金蓮を使つての芝居、或は蝶を追ふ仕草、階段の上り下り等、躑工のよさを充分に見せてくれます。この曹操は後半道化じみたところが特徴で、女の衣物を着て逃げるところは滿場を笑殺します。（『支那芝居の話』一九九〜二〇〇頁。傍点は引用者。下同）

濱の見た晩年の楊小樓は、「最古老の一人として武生界のみならず、梨園全體の神様の域に達して」（『北平的中国戲』七五頁）いたが、衰えは隠せなかつた。濱は次のように書いてゐる。

しかし武生の生命である立まわりも、よる年波でもう腰が不可ない。フラフラツとして物憂げにきまるが、きまれば、さすが素晴らしい力が、内へギユツとめり込む。腐つても鯛。北平人の此の鯛を賞美する事甚しいものがある。しかもその嗓子の良さ、説白の齒切れの良さ、支那語の生粹が此の老優の口から、燦燦とほとばしり出る。（『北平的中国戲』七六頁）

『支那芝居の話』では、次のように楊小樓を評している。

楊小樓は一昨年沒くなりました。武生泰斗、國劇宗師の看板にふさはしい名優でした。著者の見たのは晩年でしたが、芝居の大きいこと、臺詞のきれいなこと、型の美しさは未だ眼底に残つてゐます。かういふ大物が出たものですから、只今の武生はこの小樓に出てゐますが、天資の差で彼の足元へ及ぶものさへありません。（『支那芝居の話』四九〜五〇頁）

この日の公演で楊小樓の相手役をとめたのは郝壽臣であつた。（引用にあたり、改行は「」で代替する）

周の古銅器に、聲と動きが與へられた。にごつて、鏗て重くて、嚴めしくて、デロリとし乍ら、ギユツとし

まつて。／楊小樓と合座すると小樓の天馬空を行く活達さを、彼の横平たい體格、斬釘截鐵と稱せられる苦い胴太の聲がカツチリと受取める。兩人の白の受渡しの呼吸の面白さ。彼の扮する曹操などは一寸比類がない。白い隈取りが表現する殘酷な、肉食人種でなければ出相もない性慾的な感覺は全く彼によつてあます處なく、孰〔執〕念深く表はされる。／（中略）此の名優も苦汁を飲む如しとの評ある拿手戲「審李七」を二度見物し、二度目には老ひの疲れがマザマザと舞臺に現はれ、第一回の刺される様な慘たる味を缺いで淋しがらせた。最近又健康恢復して出臺との事。此の物凄い老名優の健康を祈る。（『北平的中国戲』八四―八五頁）

ここで郝寿臣と同じ淨角の侯喜瑞を、比較のために見てみよう。濱は次のように記す。

楊小樓、郝壽臣の一統を一廻り小さく又現代風にすると周瑞安、侯喜瑞となる。此の兩優の組合せが、楊・郝以來の名組合せとして、既に「連環套」等は賣物になつて居る。全ての點で郝の様な苦みには乏しいが、もつと潑刺としてゐる。楊郝の老ひて、ノロマの間に古風で、奇怪な美しさを放散するのに較べると、どうも餘りにも都會風で古臭い味の稀薄なのは御時世で仕方もないのか。しかし「法門寺」等に於て程硯秋、馬連良、尚小雲等に太刀打ちかなふ人は今の處、郝壽臣をのぞいては、彼以外にはないであらう。現在最も活躍して居る淨角の第一人者である。（『北平的中国戲』八六頁）

この侯喜瑞評に見られるように、濱は自身の好みを抑えて、公平な批評を心がけているように見える。輕妙洒脫な文章の行間に豊富な觀劇經驗に裏付けられた確かな鑑賞眼と独特の趣味がうかがえておもしろい。

二・二 一九三五年十月五日 第一舞台 義務戲（図2）

ふだんは各一座がそれぞれの劇場で公演を行うが、義務戲（慈善公演）の場合は座頭級の俳優が一堂に会することとなる。一九三五年十月五日第一舞台で行われた山東省の水害救済の義務戲はそのような華やかなキャストによるものであった。この日の最後から三番目の演目「坐樓殺惜」（烏龍院）は、『水滸伝』の宋江と閻惜嬌の物語。閻惜嬌に扮したのは花旦の于連泉、すなわち小翠花であった。

飛出した大目玉の中に含まれた媚と嘲笑と春情と妬心、高い鼻、物云ひたげな部厚な口、善笑嬰寧の稱ある

双頬の笑くぼを中心とする複雑な線、眞紅純白の對照劃然とした化粧、油に光る黒髪、之等の道具のかもしれない。梅幸を偲ばせる嬌艶な惡聲である。之をのせる精悍な、小股の切れ上つた胴、此下には慧生より更に小さい金蓮が生々と全體をゆり動かす。「烏龍院」の閨媼姣は宋江に踏まれて背を波打たせて之をいたわる。「梅龍鎮」の鳳姐は帝に指さされた海棠のかざしの花を此の足尖で美事にけりあげる。梅蘭芳ですら馬鹿の大足で「梅龍鎮」を演じ此のくだりの媚めかしさは失つて居る。此の古風な素晴らしい術を最も正しく傳へる花旦の小翠花はその喉の貧弱と淫蕩な柄にもよらうが、四大名旦が王搖卿系の新作に用ひた色目を少しも用ひない。彼は常に「烏龍院」、「翠屏山」、「戰宛城」、「梅龍鎮」、「貴妃醉酒」、「小放牛」、「胡蝶夢」等々の古き世界に踏み止まつて、巧緻を極めた做工と溢るる如き色氣をもつて、「翠屏山」、「戰宛城」、「烏龍院」、等は荀慧生、芙蓉草に優り、「梅龍鎮」、「醉酒」に梅蘭芳を凌ぐ。誠に得がたき古風な舊京劇、花旦戲の保存者ではある。

『北平的中国戲』六一―六二頁)

小翠花が出演した戲單は、濱文庫に数多く残されている。一九三四年九月三十日に華樂園で「挑帘裁衣」を觀劇し(濱文庫／集181／69)、一九三五年九月八日には同じ華樂戲院で「海慧寺」(馬思遠)を見ている(濱文庫／集181／114)。一九三六年一月二十九日哈爾飛戲院での小翠花は、中軸で楊宝森と「遊龍戲鳳」(梅龍鎮)を演じ、さらに大軸で「貴妃醉酒」を演じている(濱文庫／集181／91)。こうした觀劇經驗に基づいて、『北平的中国戲』の俳優評は書かれているのである。

さて、一九三五年十月五日第一舞台の義務戲に戻ると、この日の庄軸(最後から二番目の演目)は「探母回令」であった。「四郎探母」の一折を上演したものである。

殆ど二時間もかかる大芝居です、よい役者が揃へば滅法面白いのですが、揃はなければあくびが出ます。譚派の老生は皆ありますが、唱做ともに甚だ演じにくいものです。今日では譚富英、奚嘯伯、孟小冬が最上です、先日天津で譚富英が四郎の嘎調(特別に高く唱ひ抜く、勿論うら聲になつてはいけない)に成功したといつて評判でした。青衣の旗装といふのは滿洲旗人の服裝です。近來での大顔合せは民國二十四年十月の第一舞台で

演ぜられた、孟小冬の四郎、尚小雲の公主、芙蓉草の蕭太后、李多奎の余太君でせう。最近では國劇藝術振興會がやつた合作戲の、奚嘯伯の四郎、南鐵生の公主といふ配役も立派ですし、開明で奚嘯伯と呉素秋の合作戲でやつた役割も立派です。四郎と公主以外の配役が今日の最高のものですから書いてみますと、于蓮仙の太后、王少亭の六郎、李多奎の余太君、蕭長華の國舅、姜妙香の宗保等です。（『支那芝居の話』一八一頁）

この日の義務戲を「近来での大顔合せ」というからには、四大名旦の一角を占める尚小雲をはじめとして、孟小冬、李多奎、さらに南鉄生に対する濱の評を見ておこう。

尚小雲 高い、澄み切つて居る、裏聲の最大最美なるもの、男性の喉から如何にしてあの様な聲が出るのかしら、しかも女性の聲ではない、去勢者の高音でもない、堂々たる男性らしい或る迫力、尚綺霞先生の喉は誠に得體の知れない怪物である。一點のたるみもない精力絶倫の唱ひぶりの素晴しさ。「二進宮」、「祭塔」、「祭江」等の本格的青衣唱工戲に於ける彼は聴衆を恍惚の境にさまよはせる。唯唯唱つて居て貰ひたい。四大名旦中、青衣として最も本格的なものを持ち、花衫として最も後れた彼が青衣として之丈に精進して貰へると甚だ良いのだが。劇界に本格的青衣の獨立難しく花衫、花旦をも兼習し之が禍してか、困つた事には表情が余りにも大袈裟で彼の本領とする青衣の柄に對しては品格不足、そして小煩さい技巧が大阪役者を思はせる。だが上滑りで見ても呉れの良い俗受けのする藝と、混亂した現代中國民衆の趣味に適ふ少少ピントの外れた上海的惡趣味の茶番劇（之を大マヂメだから一寸困る）、一流役者中第一等の安價な入場料で現在北平第一の人氣を保つて居る。（『北平的中国戲』五六～五八頁）

孟小冬 余叔岩を宗とする由、溢くて力強い唱ひぶり。之にも女優臭は微塵もない。男伶青衣、尚小雲と彼女、「四郎探母」合演は尚の華麗な喉と相抗して、誠に凄じい出来であつたし、ゆくりなくも初期お國歌舞伎を連想して面白かつた。（『北平的中国戲』九六頁）

李多奎 彼の師、龔雲甫没して後、遂に彼以上の老旦はない。聲の質もよく聲量の豊富もいゝ。十分に聴ける人だが、表情の拙劣と師の様な氣品が更にならないのが悪い。太后等に扮しても田舎上りの婆としか見えない。唱も花腔多く師に及ばないと云はれて居る。全く老旦界は人材の缺亡で富連成の時世實の將來に期待をかける

のみ。、『北平的中国戯』六五頁)

南鐵生 票友の出身だけに臺步、表情、水袖の扱ひ方等演技に難もありませうが、太つた身體を旨く扱ひ、無類の美しい眼を働かした艶媚なところは梅以上ともいわれます。台詞は旨く、圓甜朗潤の嗓音も結構です。しひて擧げれば、呼吸をつぐところや、尾聲のはね上るところ、高音が尖るところ等が耳障りかも知れません。今は一頃の人氣はありません。、『支那芝居の話』六九〜七〇頁)

三 海派京劇に対する評価、および濱の演劇観

『支那芝居の話』の中に、「九更天」の筋書きと評を記して、上海を拠点に演じていた麒麟童(周信芳)を北平の馬連良と比較している箇所がある。

梆子から移されたものといはれます。これや烏龍院のやうな做工戲になると馬連良の獨擅場です。上海では麒麟童のもので、この人の九更天を偶然見たことがありますが、芝居の大層上手な人です、ただ嗓子はしやがれ聲で、それなりによいといふ人もありますが、大したことはありません。馬連良となると嗓子も衰へてはゐますが立派なものです。表情は細膩で、而も悽慘な舞台は目をおほはしむるものがあります。その他李盛藻、雷喜福も演じますが、芝居がよく出來てゐるだけに面白く觀られます。、『支那芝居の話』一八五〜一八六頁)

海派を代表する周信芳の演技は高く評価しているものの、その独特のしやがれ聲は「大したことはありません」と一蹴している。一方、京派の代表格・馬連良に対しては、全体としてはるかに高く買っている。

このように海派よりも京派の方が好みにかなつたようだが、このことは濱の演劇観と無縁ではないようだ。『北平的中国戯』の次の一節を読むと、濱が新式の舞台や演出に戸惑いながらも、なんとか折り合いを付けて「民衆と共に在る支那戲の愛敬」を「ホ、エマシイ」ものとして見ようとしている姿勢がうかがわれる。

昔の舞臺に於ける簡略主義の漸次姿をひそめ、西洋的煩雜、西洋的田舎漢の風景を現出する事が惜しい。能舞臺の三方に欄干をつけ、橋掛りを去り、鏡板の部分の左右に上場(向つて左)下場(向つて右)のある幕を用

ひ、椅子卓子及び少數の小道具丈で山水宮殿樓閣何物をも自由に表現した昔式の舞臺は今は僅に科班富連成の出演する乾隆以來と云はれる古い廣和樓、其他二三に最も純粹の形を止めて、他の新式と稱するものは眞鑄の欄干、西洋式額椽舞臺、むき出しのイライラしい照明、之丈ならまだしも折角の支那趣味豊かな暗示的な後方の幕（能なら鏡板に當る部分）を廢して醜怪な錢湯の油繪の如きバックを得々として用ひる——甚しいのは二階の作りものの中に入つて喜んで居る、（中略）中國人の想像力も之程迄に枯渴萎縮したのか。

華樂、中和、慶樂、華北、吉祥、哈爾飛、開明、第一舞臺何れも淋しくも西洋化の怪物がノサバリかへつて——舞臺の上では「天河配」の織女はセルロイドの赤子を生み、「梅龍鎮」の鳳姐は印刷文様の盆をさゝげ、「法門寺」では宋代の媒婆がレースの上衣で吸ひつけ煙草を演じる。數へ立てれば限りもない。むしろ之等は民衆と共に在る支那戲の愛敬で昔の歌舞伎をさへ思はせてホ、エマシイではないか。唾をはき手ばなをかむ音、等と余り洗ひ立てゝ居ると北京人に笑はれ相故、こゝらで、も一回轉して想像にまかせて昔の世界に遊びに行く。

（『北平的中国戲』四八〜五〇頁）

濱は自身の演劇觀を大上段から論ずることは決していないのだが、彼の芝居の見方とでもいうようなものをまとめるとするなら、目加田誠が「浜さんは芝居と來たら、中国の芝居でも日本の歌舞伎でも、しんそ、好きなのだ^③」と評した無類の芝居好きという情熱的な一面とともに、次の『支那芝居の話』の一節のように演劇史的觀點をふまえた冷静な觀察者という一面とが、彼自身の中に同居し兩立していたように思われる。

京劇には色々な難點はあるとしても、支那劇の持つ數百年來の成果を傳へてゐるのでして、誰でも一見してその偉大なる藝術性に打たれます。この藝術を今以上に低俗化させず、長所を生かして眞に國劇としての價値を保たしむることは、とりわけ俳優達の責任でせう。今のやうに看客の好むに任せて、神怪劇の如き荒唐無稽の新作をものしたりしてゐたのでは駄目です。近頃益々上海式の背景を用ひたり、色々な小道具を、而もセルロイド製の人形を持ち出すが如き履き違ひは大いに改める可きであり、その様式化の美しさを壞すやうなことは特に注意すべきでせう。（『支那芝居の話』三〜四頁）

しかし、濱の真面目はあくまで『北平的中国戲』『支那芝居の話』に見られる個々の俳優評にあることは、いくら強

調しても強調しすぎることはない。濱の俳優評は独特の風韻に富んだ軽妙洒脱な文体で、深い愛惜を込めて俳優とその演技を描写してあますところがない。それに対して、辻聴花の劇評は日系中国語紙『順天時報』に一九一三年から一九三〇年までほぼ連日掲載され、劇評・俳優評から演劇メディア論に至るまで雑多な内容を含み、全体として京劇の近代化を促す演劇改革の指向性を有するといえよう。新聞の劇評に対して著書という発表媒体と著述形式の違いはあるものの、濱は辻聴花の劇評を受け継ぐと同時に、見巧者の立場から役者の形象と演技を記した俳優評をいっそう純化洗練させ、一九三〇年代北平の京劇上演を後世に伝える貴重な記録を残したのである。

注

- (1) 傳芸子との関わりについては、拙稿「濱文庫所蔵の欧陽予倩致濱一衛書簡について」(『中国文学論集』三九、二〇一〇) 注三二参照。傳惜華および齊如山については、濱一衛自身の文章に以下の記述がある。

濱一衛の見た一九三〇年代中国演劇



図1 1934年9月8日開明戲院戲單

九州大学附属図書館濱文庫所蔵
(浜文庫/集181/66) 21.5×28.2 cm



図2 1935年10月5日第一舞台義賑戲單⁽⁶⁾

九州大学附属図書館濱文庫所蔵
(浜文庫/集181/42) 25.0×35.5 cm

この我儘な寫眞帖に更らに花を添へたく、北平國劇學會の齊如山先生の御著書の挿畫、寫眞等の轉寫、復寫を願つたが快く承諾された、又同學會の傅惜華先生は寫眞の戲題等一々御指教賜つた、合せて兩位先生に深く感謝いたします。（『北平的中国戲』二頁）

もう留学期を終えて帰国の日の近^ずいた初夏のある日、当時北京の劇壇で大御所的存在であつた齊如山氏が私のために送別会を催して下さつた、——誰か中国の方が私のために催して下さつた送別会に齊氏が出席して下さつたのか記憶がさだかでない。齊氏は梅蘭芳の後楯として梅氏を大きくした人で、当時、北京の少年俳優で小梅蘭芳（一九四七年一月五日飛行機事故で死去）といわれて人氣絶頂の李世芳（女形）をひいきにしていた。（濱一衛「相公について」主として品花宝鑑より見たる」、目加田誠博士還暦記念論文集刊行会編纂『中国学論集』目加田誠博士還暦記念』東京・大安、一九六四。三〇三〜三〇四頁）

（2）周信芳については、藤野真子「周信芳と『劇評家』」（『野草』八二、二〇〇八）参照。

（3）目加田誠「浜さんのこと」（『中国文学論集』第四号、福岡・九州大学中国文学会、一九七四）六頁。のち浜一衛『支那芝居の話』（アジア学叢書七六、東京・大空社、二〇〇〇）六〜七頁。

（4）辻聴花に対する研究史をまとめたものとして、田村容子「順天時報」と劇評家辻聴花初探（久堀裕朗・松浦恒夫編『公開講演・演奏会「淡路人形浄瑠璃と大阪」実施報告／第二回日中伝統芸能研究交流会報告書』都市のメディア空間と伝統芸能』大阪・大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター、二〇一二）がある。

（5）『支那芝居の話』の構成や著述方式は、辻聴花の著書『中国劇』（北京・順天時報社、一九二〇）、およびその日本語版『支那芝居』（北京・支那風物研究会、一九二三〜一九二四；復刻版、東京・大空社、二〇〇〇）から影響を受けていることが見て取れる。

（6）拙稿『濱文庫に所蔵される南澤戲單の由来について——附：濱一衛著『劉氏の嘉業堂』（『九州大学附属図書館研究開発室年報』二〇一二／二〇一三）に掲出した『濱文庫所蔵戲單目録（第二版）』において、この戲單を一九三四年十月五日としたのは誤りであり、ここに訂正したい。なお、この戲單は『北平的中国戲』五二頁にも掲載されている。